
Produce !

ninety3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Produce!

【Z-IPード】

Z0707Z

【作者名】

ninetys

【あらすじ】

周りとは変わった価値観を持つ少年が、美人だが性格に難がある少女を人気者にしようとする物語。

1 (前書き)

初めての小説です。

女性のほうが男性よりも精神年齢が高い。

中学の頃、一度保健の授業のときに読んだ資料にそんなことが書いてあった。

だが時々、いや頻繁にそれは嘘ではないかと思つことがある。

中学の頃は俺も精神的に馬鹿だった。

そのせいか俺はそんなことは気にもしなかった。

でも高校に入学して五ヶ月で、俺は気付いてしまった。

いつまで経っても、女はキャーキャーうるさかつた。

あいつがウザいだの、教師が鬱陶しいだの、そんなあまりにも低レベルで幼稚な話を喋り、汚い黄色い笑い声を上げている。

なんなんだこいつらは？

昭和にはこんな奴等はいなかつただろうな。

この頃からだらう、俺は女が嫌いになった。

もちろん、人間としてだ。

「朝から何なんだよ。俺が席に着けないだらうが、糞屁どもが…」

朝から俺はイライラしている。

今日は九月一日、夏休み明けの始業式。

俺はいつもよりも遅く登校してしまった。

理由は簡単、夏休みボケだ。

そして教室に入つて俺の席のほうを見てみると、糞尼ビもが勝手に占領していたわけだ。

「おいおい、朝からイライラすんなよ～お前怒ると怖いんだからさ」

教卓付近で俺がイラついていると、我が隣のクラスの友人、瀬尾が話しかけてきた。

「スマンスマン、朝からこれだったら一日持たないな

「そうそう

「で、瀬尾は何をしに来た？俺に会いに来たわけじゃないだろ？」

「愚問だね。俺がここに来る理由は一つしかないだろうが匠たくみ」

瀬尾は掛けていた眼鏡（伊達）を人差し指で持ち上げた。

ちなみに、瀬尾が言った匠というのは俺の下の名前だ。

苗字は冬林ふゆばやしだ。

「お前も飽きないねえ、あんな女見てばっかで。前にも言つたがあれも俺にしたら糞尼くそ尼だ」

「はつは～ん、わかつてないのはお前のほうだよ。あの美貌を見て心打たれるものはいない！」

そう言つと瀬尾はお田道の女のほうを見つめた。

御陵綾みやさわあや、今時類稀に見る綺麗な長い髪の女だ。

確か親が病院の院長だと、まあ要はお嬢様なわけだ。

性格はあまり良くないと見える。

何故なら、そいつの周りには友達がないからだ。

まあお嬢様つてのが一番なんだろうな。

「あ、どうでもいい話だ。

人間外面が一番じゃないからな。

「じゃあ告白すれば良いじゃんか、お前好きなんだろ？」

「いや~好きなんだけど…なんか近寄りがたいじゃん」

「なら所詮その程度なんだな、お前のやの愛は」

あまりにも瀬尾がチキンだったから、試しに少し煽つてみた。

「なんだとー俺の愛はそんなに薄っぺらくないだー！」

「じゃあ告白してみるよ。できなかつたらお前をチキンと任命するわ。だからのうち獲られちまつぞ」

「そんなことされたかよー…やつてやるよ、俺男だから」

よし、煽り成功。

少しあは楽しめそつだな。

「それじゃあ結果教えてくれよ」

「おつよー、バババッて越し抜かすんじゃねえぞー。」

やつ言つと、瀬尾は意氣揚々と自分の教室へ戻つていった。

れひと、わざわざ俺も席に着くが。

始業式全日程が終わり、今は帰りのＳＴ中。

俺は退屈で何度も聞いた担任の声を聞き流していた。

気がつけば、ＳＴは終わり後は帰るだけ……いや、瀬尾の告白を見届けなければならないな。

瀬尾を呼びに席を立つたら、瀬尾が教室に入ってきた。

顔がかなり強張っていた。

俺は面白そうだったから、あえて声をかけなかつた。

人の恋路ほど面白いものはない。

「みみみみ、御陵さん。ちょっとといいかな？」

おおー、ナイスどもり。

「…えつとなにかよつへ。」

御陵はぶつめりもひづて言った。

「ここじゃ話し難いから南階段へ来てくれないかな？」

ほほつ、よく考えたじやないか。

南階段はあまり使わないため人がまつたくない。

いわゆる告白スポットなわけだ。

成功率は6割らしい。

：誰が計算したんだか。

御陵はゆつくり頷くと瀬尾と一緒に教室を出た。

俺は着いて行かず、階段の様子が見える場所へ移動した。

わしゃわじうなつてゐんだ。

おおー瀬尾がなんか話してゐる。

身振り手振りを加えながら必死にやつてゐるな。

んでその告白しきもの元御陵は…

頭を下げる。

瀬尾は何か叫んでる。

ちょっと近づまで行ってみよう。

「どうしてかな？理由を聞きたいんだけど

瀬尾が言った。

「私恋人よりも今は……友達が欲しいの」

「俺は恋人がいいの！ああもういいよ……やっぱり無理だった」

瀬尾は御陵に背を向けながら去つていった。

可哀相に。

「ちょっと、やつきのは無いんじゃないのか。あれは勇気を出して
いつたあいつが報われないじゃないか」

俺は彼女に話しかけた。

「見てたのですか。貴方のほうこそ良くないんじゃないんですか？
人の告白現場を覗くなんて」

毅然とした態度で答えてきた。

それが少し頭にきた。

「偶然通りかかっただけだ。別に悪いとは思っていない。なあお前どうすんだよ？またお前の株が下がっていくぞ。今度は恋愛もしない、男を振りまくつてる悪女つてレッテル貼られるぞ。」

「別にどうでもいいわ、そんなの」

「……お前なあ～そんなのだから友達いな

「そんなのわかつてるわよ！あなたに言われなくとも！」

ぶつきらめうだった彼女がいきなり怒鳴りだした。

よく聞くと涙声だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0707n/>

Produce !

2010年10月13日06時10分発行